

令和6年（行コ）第9号・サケ捕獲権確認請求控訴事件

控訴人 ラポロアイヌネイション

被控訴人 国ほか1名

2025（令和7）年8月22日

札幌高等裁判所 第3民事部2係 御中

控訴人訴訟代理人

弁護士	市	川	守	弘
弁護士	長	岡	麻	恵
弁護士	毛	利		節
弁護士	難	波	徹	基
弁護士	木	場	知	則
弁護士	今	橋		直
弁護士	皆	川	洋	美
弁護士	伊	藤	啓	太

準備書面（3）

本書面は、9月7日に予定されている現地における進行協議期日の準備として、進行協議が行われる現地及びその周辺についての説明とアシリチェプノミの内容について明らかにするものである。なお、現地進行協議の事務的な内容は別途書面にするものである。

1 現地の説明

進行協議が行われる現地は、浦幌十勝川河口部に注ぐ支流である新川の河口部である。国土地理院の写真地図を以下に貼り付け、進行協議場所を○で示す。地図の右上にある集落は十勝太の集落である。元ラポロアイヌネイション会長の故差間正樹氏の母親の実家があった地点を△で示す。



新川は河川改修がなされ直線化されているところ、古くは「シラツナイ」と呼ばれ蛇行していた（甲 2 3）。また写真の右上の大きな池はかつての十勝川の流れの部分で池や湿地として残っている。

浦幌十勝川は河川改修前（甲 6 1）の昭和 3 7 年までは十勝川本流であった。「トカチフト」の地名は甲 6 の 3 7 1 頁 4 行目に松浦武四郎も記載しているとおり、江戸時代からの名称である。十勝太のアイヌの人口は、安政 3 年（1 8 5 7 年）の「トカチ」には 2 5 軒（甲 5、4 6 3 頁）となっているが、甲 7 の戊午（1 8 5 8 年）の年には「土人小屋 2 軒」（甲 6、3 7 1 頁）となっている。これは前者の記述が「トカチの川筋には当時 2 5 軒」と記述されているようにトカチフト周辺のアイヌ居住家屋数が記載されているからである。渡しがあった「小休所」の後ろには 3 軒のアイヌ家屋（甲 5、4 6 1 頁）、2 軒のアイヌ居住小屋（甲 6、3 7 1 頁）とあるところから、十勝川では渡し船で川越えをしており、渡し守の休み小屋の後ろに 2～3 軒のアイヌが住み、その周辺には 2 5 軒のアイヌが居住していたことがわかる。現在の十勝太の集落の場所にこれら 2 5 軒のアイヌが住んでいたと思われる。ラポロアイヌネイションの元会長差間正樹氏、前会長の差間啓全氏や長根弘喜氏の先祖のアイヌはトカチフトのアイヌなので、この 2 5 軒の中に含まれている。

また、渡し船はアイヌが運航していたと思われる。十勝川は、襟裳と釧路を結ぶ主要な道路を渡しによって渡河していたところ、蛇行して流下するために複数の渡し場があった。ラポロアイヌネイションの長根弘喜氏の先祖は渡し場

は特定できないながらも渡し場の渡し守をしていたと言われている。

河川改修前の十勝川の川幅は2丁（甲5）ないし150間（甲6）と記述されているので、少なくとも200メートルは超えていた。現在の浦幌十勝川は50メートル程度の狭い川となっている。

2 現場周辺の説明



アイヌ墓地

十勝太Dチャシ

若月遺跡

十勝太川口チャシ

進行協議場所の北側の河岸段丘上一帯には、縄文文化期から擦文文化期の遺跡が存在する（赤丸内）。十勝太河岸段丘遺跡と呼ばれ200基を越える住居跡があると言われているが詳細はまだ明らかにはされていない。そのうちの一つに「若月遺跡」と呼ばれる場所があり、発掘調査がなされている（1972～74年1872～74年）。また十勝太海岸段丘遺跡群もあり、縄文文化期、擦文文化期、アイヌ文化期の遺跡がある（青丸内）。

チャシとは、アイヌが16世紀から18世紀にかけて作った遺跡で、「一般には砦や城と呼ばれるが、「柵囲い」の意味とされる。戦闘の場であるとともに、祭事・話し合いの場など、さまざまな用途があったと考えられている」（加藤博文等編「いま学ぶ アイヌ民族の歴史」山川出版社 2018 45頁）。

十勝太には現在判明している限りでも上記2つのチャシがあり、ラポロアイヌネイションの先祖が古くからこの地に住んでいたことがわかる。

これらの遺跡群は、進行協議の場所の北側に見える段丘上に存在している。

3 アイヌ人骨の発掘

アイヌ墓地の場所には、十勝太アイヌの墓地が古くから存在し、現在も新しい墓石が建てられている。十勝太のアイヌは古くからこの地に埋葬していた。浦幌町が墓地としては把握していない墓地となっている（「知らない墓地」という意味）。東京大学の渡辺仁教授は1965年にこの近くから1体のアイヌ遺骨を発掘している。

4 十勝太のアイヌは1000年以上この地に居住している

十勝におけるアイヌの歴史について簡単に触れておく。

十勝川中流域の帯広市大正遺跡から約1万4000年前の土器が発見され、この土器の底からサケなどの海洋性の食料を煮炊きしたことがわかっている（「いま学ぶ アイヌ民族の歴史」11頁）。

十勝の文化は、縄文文化期から紀元前5世紀頃から7世紀前半までの続縄文文化期を経て、7世紀後半からの擦文文化期になり、13世紀以降のアイヌ文化期へつながる。若月遺跡は続縄文文化期からアイヌ文化期へ至る複合遺跡で、擦文文化期の土坑（墓穴）からガラス玉等が発掘されていたり、アイヌ文化期の地層からは女性の人骨が発掘されている。若月遺跡は十勝太遺跡群の河岸段丘の最下段の地層から発見された（浦幌町立博物館「北海道浦幌町の十勝太若月遺跡から出土したガラス玉の成分分析」、「十勝太若月遺跡についての若干の考察」等）。なお、前記の渡辺仁及び若月遺跡から発掘された人骨は、ラポロアイヌネイションに返還され、浦幌墓苑に再埋葬された。

このように、ラポロアイヌネイションの先祖は、続縄文文化期、擦文文化期、アイヌ文化期、そして現在へと、1000年以上の歴史をもって、この地に居住していたことがわかる。

進行協議の場所の目の前に広がる景色は、この歴史を持った景観なのである。